

エッサ・デ・ケイロース著 『マイア家の人々』 (7)

― 第7章 ―

尾 河 直 哉

Tradução japonesa dos *Maias de Eça de Queirós* (7)

NAOYA OGAWA

キーワード

19世紀ポルトガル文学 (literatura portuguesa do XIX século)、
写実主義 (realismo) エッサ・デ・ケイロース (Eça de Queirós)、
マイア家の人々 (Os Maias)

第七章

ラマリエーテでは、昼食後、アフォンソダ・マイアとクラフトが
チェスをやっていた。五月の好天の暖かな光を取り込むために書齋
の窓を三枚開け放ち、すぐそばの火のない暖炉には、今では植物が
ところ狭しと並べられていて、さながら瑞々しく明るい家庭用祭壇
になっている。絨毯の上では、斜めに差し込む帯状の陽光を浴び

て、ふわふわとした毛に覆われた巨大な「ボニファシオ猯下」がま
どろんでいた。

クラフトは数週間前から、ラマリエーテの内輪のメンバーになっ
ていた。カルロスとクラフトは趣味も考え方もほぼ同じで、同じよ
うに骨董マニア、古物マニアときており、ともに熱狂的なフェンシ
ング好き、しかも知的なディレッタントという点でも共通していた
から、愛想よく気軽で表面的な関係をたちまちのうちに結んだの
だった。いっぽうアフォンソも、まもなく、この毛並みの良いイギ
リス人紳士ジェントルマンに深い敬意を抱くようになり、その教養、屈強さ、落
ち着いた物腰、堅固な習慣、繊細な感性、廉直な思考に感服してい
た。ふたりはたまたまタキトウス①、トーマス・マコーリー②、エドマ
ンド・パーク③が好きだったが、そればかりか、湖畔詩人のうちふた
りまでも趣味が一致していたのである。クラフトはチェスも強く、

その性格は、長くつらい旅のあいだに青銅のような堅固さを獲得して、アフォンソにしてみれば「あれこそまぎれもない男」だった。早起きのクラフトはオリヴァイスを朝早く馬で発つので、マイア家の昼食にふらりとやってくることもあったが、アフォンソとしてはできることなら毎晩でも夕食に招待したかった。とはいえ、少なくとも夜はきまつてラマリエーテで過ごしていた。本人の言によれば、教養のある育ちの良い人たちに囲まれて落ち着いた会話ができる隠れ家が、リスボンにやっと思つたのだから。

カルロスはめつたに外出しなかつた。仕事といえど読書だけ。いつときは医者稼業に活気と多忙が戻りそうな兆しも見えたが、その兆しや哀れ、憐れも潰え去り、残つたのは近所の患者三人だけだった。今や馬車も、馬も、ラマリエーテも、贅沢な習慣も、すべてが自分を趣味道楽へと押しやっているような気がしてならない。慧眼なテオドージオ博士など、ある日、齒に衣着せずこう言った。

「あなたは医者にしちや洗練されすぎとりますよ！ 女性の患者さんならどうしたって色目を使つちまう。奥さんを安んじて寝室に預けるブルジョアがおりますか？… 家長はあなたに怯えとるんです！」 実験室までもがカルロスの評判に悪影響を与えていた。金持ちで、インテリで、新しいもの好きで、当世風のカルロスは、患者に致命的な人体実験を施していると同僚たちが言うのである。

『医療新報』で開陳した、ウィルス接種で流行病を予防できるという考えも笑いのものにされていた。夢物語だと思われていたのだ。そこでカルロスは古代医学と近代医学にかんする自著に逃避し、金持ちの芸術家よろしく暇に飽かせて執筆に精を出して、一、二年分の知的興味をすべてそこに投入していた。

その朝、室内でチェスの試合が肅々と進むいっぽう、テラスではカルロスが、パラソルの陰になった、インドの大きな竹製肘掛け椅子にもたれて、イギリスの雑誌を読みながら葉巻を吸い終わろうとしていた。空気を天鵞絨のように柔らかくし、木々と芝生を欲望さ

せるあの生暖かい春の息吹がカルロスを撫でる。

その傍らではもうひとつの竹製肘掛け椅子にもたれ、同じく葉巻を啜えて、ダーマソ・サウセデが『フィガロ』紙に目を通していた。打ち解けた怠惰な格好で足を投げ出し、友人カルロスの傍らで、テラスの横に生えたアフォンソの薔薇を眺め、背後に開いた窓からラマリエーテの豪華で気品あふれる室内を感じながら、金貸しの息子は、マイア家の人々と親しく付き合うなかでしばらく前からもてるようになった甘美な時間を味わっていた。

ホテル・セントラルで夕食会があつた翌朝、サウセデ氏は名刺を置きにラマリエーテに立ち寄つたが、この名刺というのがこれみよがしのややこしい珍品で、角を折り曲げているように見せかけて、そこに肖像写真をはさんであつた。写真には羽根飾りのついたヘルメットをかぶつた男が写っており、その下には「ダーマソ・カンデイド・デ・サウセデ」、そのさらには「キリスト聖職受給者」と勲章名が添えられている。一番下には住所が「ラバ、サン・ドミンゴス通り」と記されていたが、この住所には棒線が引かれ、横にもつと見栄えのする「カピュシーヌ大通り、グラランド・ホテル、一〇三号室」というフランス語の文字が青インクで書かれていた。それからサウセデはカルロスに会おうと診療所も訪ねたが、不在のため召使いに名刺をもう一部渡しただけだった。だがある日の午後、アテロを歩いているカルロスの姿をついに見つけて駆け寄ると、なんだかんだと食い下がって、まんまとラマリエーテまでついてきたのである。

ラマリエーテでは中庭に入っただけでまるで美術館にでも入つたように興奮して感嘆の叫び声をあげ、絨毯と陶器と絵画を前にすると、「こりやまたほんとうに粹だ！」と得意の大げさな言葉を吐いた。カルロスはダーマソを喫煙室に連れて行った。ダーマソはカルロスから葉巻を一本もらうと、脚を組んで、自らの意見と趣味を小出しに披歴し始めた。リスボンはひどいが、パリは居心地がいいで

すなあ。リスボンではとくに「女」という種属が不足していますから。もっとも「その点にかけて」わたしは今のところ神からすっかり見放されているわけではございませんがね。骨董品の類も好きです。ただ、ここではいかものを掴まされることが多い。たとえば骨董の椅子なんて、人がまともに座れそうなものなんぞ見たことがない。読書も好きですよ。枕元に本を切らしたことはありません。最近ではドーデにはまっています。とても粹ですよ。ただ、いささか雑然とした印象が。若い頃はいつも夜ふかしで、朝の四時、五時までどんちゃん騒ぎをしたものです！ 今では残念ながら生活習慣が変わってしまいました。ときには羽目を外すこともないではないんですが、まあ祭日だけでして…と、ここまで言うと、サウセデは続いて恐ろしい質問を始めた。イギリス式の一頭だての軽馬車をもっていらっしやるなんて、ご自分でも粹だと思いいなりませんか、マイアさん。外国で夏を過ごしたい社交界の若者にとって、どちらが洗練されているでしょうか、ニースとドーヴィルでは？… 家の外に出ると、感動さえ伺えるまじめな顔で、（もし秘密にしていられないなら）教えていただきたいのですが）マイアさん御用達の仕立て屋はどちらでしょうか、と尋ねるのだった。

この日からダーマソはマイア家から離れなくなった。カルロスが劇場に姿を見せれば、たちまち席を離れてすつ飛んでゆく。厳肅なアリアの真最中でもおかまいなし。紳士のブーツを踏みつけ、ご婦人の服をしわくちやにして席を離れると、折り畳み式のシルクハットを突然広げ、アリーナ席のカルロスの横にやってくる。赤い頬で、燕尾服には椿を挿し、袖口にはボールほどもある巨大なボタンをこれ見よがしにくつつけている。一度か二度、カルロスがたまたクラブ・グレイミオに入ったときなど、ダーマソは対戦相手の憤慨もなんのその、勝負を放り出すと、カルロスにくつついてマラスキーノ酒や葉巻を勧めながら、部屋から部屋へと犬のようにつまわった。そんな日の一齣だった。カルロスがくだらない冗談を言

うと、待つてましたとばかりにダーマソが涙を流してソファの上を笑い転げ、横っ腹に手を当てて可笑しくて腹が痛いと呼んだことがあった。グレイミオの会員たちが寄ってきたが、ダーマソはあはあ言いながらながら冗談をくり返している。カルロスは腹を立ててその場から逃げ出し、ついにはダーマソが嫌いになった。カルロスはダーマソにつっけんどんな返事しなくなり、遠くにあの頬と丸々と肥えた腰が見えると、危険も顧みず、軽装二輪車を急に方向転換するようになった。だがこうした努力も結局無駄だった。ダーマソ・カンダイド・デ・サウセデはカルロスに喰いついたままいつでも離れなかつたのである。

その後のある日、タヴェイラがとんでもない話を引つ提げてラマリエーテに現れた。前日グレイミオで、とあるグループがマイア家の人たちについて論評をしていた。どうやらそのなかのゴメスとかいう輩がカルロスはアホだと怒鳴つたらしい（タヴェイラは現場に居合わせておらず、話は他人からのまた聞きだった）。そばで『リリュストラスイオン』誌を読みふけていたダーマソが、真つ蒼な顔ですつくと立ち上がり、わたしはカルロス・ダ・マイア氏と親交を結ばせていただいておりますが、もしこれ以上あの紳士を汚すような言辞を弄するならば、あなたの脳天をステッキでか割ります、とゴメスに言い放った。ゴメスは言葉をぐつと呑みこんで、じつと下を向いていた。生まれながらに虚弱な体質だったこともあるが、じつはダーマソの店子で、家賃の支払いが遅れに遅れていたからである。アフオンソ・ダ・マイアはこの事件を偉業として讃えた。カルロスがダーマソをラマリエーテの夕食に連れてくるよう望んだのは、じつはアフオンソである。

夕食に呼ばれたこの日は、ダーマソにとって、空色と金色で染め上げられたように美しい日だった。しかし、気分がやや優れず、まだベッドに横になっているカルロスが、若者がやるようにダーマソを寝室に迎え入れた朝は、それにもまして素晴らしかった… この

日から二人は親しくなり、ダーマソはカルロスにため口がきけるようになった。そしてこの週にはさらに、ダーマソの便利な能力が判明した。カルロスに代わって衣類の入った木箱を発送しに税関まで行ってくれたのである(ヴィラサはアレクサンダー・ジョーに行っていない)。またあるときには、カルロスが『医療新報』に載せる原稿を浄書しているところにやってくる、リトグラフさながらのびっくりするほど美しい文字で浄書を手伝った。それ以来、ダーマソはカルロスの机で数時間過ごすようになった。顔を真っ赤に上気させ、眼をまん丸くして、舌先を出しながら熱心にメモ書きや雑誌の写しや本のネタを書き写してゆく。それはまさに気心の知れたため口を許せるほどの献身ぶり、カルロスもそれのため口を認めたのだ。

ただ、ダーマソは、伸ばし放題にし始めた髭から、はては靴の形にいたるまで、まるごとマイアを真似しないではいられなかった。骨董品漁りも始めた。古い鉄屑、煉瓦の小片、コーヒーポットの割れた取っ手など、考古学的なガラクタがいつもダーマソの四輪箱型馬車に載せられていた。そして知り合いをみつけては、聖具室にある秘密の場所でも見せるようにドアを少しだけ開けて自らの洗練をひけらかすのだった。

「どうです? すごく粋シツクでしょう! … マイアさんに見せに行くところですね。ちよつと見てごらんさい! ね、どうですか? 真正銘の中世の品。ルイ十四世時代の古物だ。カルロスはきつと焼きもちを焼くだらうなあ!」

ただ、こうした薔薇色のつきあいのなかにもダーマソにとつてつらいことはあった。肘掛け椅子に深々と腰かけ、カルロスとクラフトのあいだにいつ果てるともなく交わされる芸術談義や科学談義にじつと耳を澄ませているのは、けつして楽しいとはいえなかった。また、実験室に連れて行かれ、自分の身体を使って電気実験をされたときには、後に本人が打ち明けたところによると、いささか気分

が悪かったという: 「身体のなかで二人の悪魔がまるで取っ組み合いをしているようでしたよ」とダーマソはゴウヴァリーニ伯爵夫人に言った。「しかも、このわたしときたら交霊術が大嫌いなのに!」

しかし、夜、グレイミオのソファに腰かけて、あるいは友人の家でお茶を呼ばれながら、髪の毛を掻き上げ掻き上げ、こんな風になることができれば、この苦痛も少しは報われるのだった。

「今日はマイアとすばらしい一日を過ごしましたよ。フェンシングをやつて、古物屋に行つて、議論をして… 粋シツクな一日だった! 明日の午前中もマイアとひと仕事! いやね、一緒にベッドカバーを見に行くんですが」

その日曜は、まさにベッドカバーをルミアールルミアール見に行くことになつている日だった。カルロスはご寝所ゴネドを、真珠色とキンポウゲ色の古いサテンのベッドカバーで覆いたいと考えていたが、その色のベッドカバーを探して、アブラハム爺さんがリスボンと近郊をくまなく回つてくれていた。そしてその日の朝、爺さんがやつてきて、洗練されたもの(「えらく美しいですよ、そりやもうすてきでして!」)を二枚見つけたと教えに来てくれたのである。それはメデイロスとかいうご婦人方が住むお宅にあって、二時にはマイア氏を待つていてくれるという。

ダーマソはすでに三度咳払いをして時計を眺めたが、カルロスは心地よさそうに雑誌を読みふけているので、粋シツクな男に許される意欲にふたたび落ち込んで『フィガロ』紙を舐めるように読み始めた。ついに室内のルイ十五時代の時計が銀鈴のような澄んだ音で二時を打った:

「いい女だよ、こいつは!」ダーマソは自分の太腿をポンと叩きながら叫んだ。「だれのことか新聞にのつてると思う? シュザンヌだよ。おれのシュザンヌ!」

カルロスは本から眼を離さない。

「なあカルロス」と言い募る。「ちよつといいか？ 聞いてくれ。こいつはいい女だよ。このシユザンヌっていうのは、パリでぼくの恋人だったんだ。なかなかのロマンスだったぞ！ ぼくにぞつこん惚れちゃってさ、服毒自殺まで図ったんだから、まったく大した女だよ……『フィガロ』のこの記事によると、フォリ・ベルジェール⁶にデビューしたぞうだ。話題になつて……な、いい女だろ？ めちゃくちゃ『粹』な娘つこだ……『フィガロ』によると、なになにに、恋多き女だつてさ。おれとのこともきつと知つてたはずだ……パリじゃだれでも知つてたからな。それにしてもシユザンヌ、あいつはいい脚してた！ あの娘と別れるのは大変だったよ！」

「女の話ねー」カルロスはそう呟いて、ますます雑誌に没頭した。

「おれが仕留めた女」の話をしだすとダーマンは怒涛のように語つて止まなかつた。どんな女も哀れなことにダーマンの人柄と「ファッション」には抗うことができないと固く信じ込んでいたのである。そして事実、リスボンではその通りだった。四輪箱型馬車と馬をもち、社交界で一目置かれた金持ちである。若い女ならだれでだつて甘い眼差しを投げかける。そして裏社交界では、本人いわく、「ものすごい威光を放っている」。ダーマンはスペイン女を自宅に囲うことで首都では若いころから有名だった。月極めで四輪馬車を女に貸し与えていたが、こうした並外れた豪華さから、たちまち淫売屋のドン・ジョアン五世⁷と持ち上げられるようになった。ガフアニヤ伯爵夫人との関係でもその名をとどろかせている。ガフアニヤ伯爵夫人とくれば、がりがりに痩せた白塗りお化けで、ポルトガルで地位のある男を全員喰つた女である。ダーマンの順番が巡つてきたときには、五十になりなんとする年齢だった。もちろん、こんなぎしぎし軋る痴女を抱いて恍惚となれるはずがない。だが、夫人は若いときには王のベッドで寝たこともあつたらしく、厳めしい髭が夫人を舐めまわしたのかと思うと、崇拜の念がダーマン

を魅了した。そしてへいこらしながら嬉しそうに夫人のスカートにしがみついていたが、欲求を満足させてうんざりした老女は、侮辱の言葉を投げつけて男を無理矢理追い払つた。次いでダーマンが見舞われたのは悲劇であつた。プリンシペ・レアウ劇場の女優で、肉の山のような女がダーマンに惚れた。女はある晩、嫉妬とジンに煽られて、マツチ箱を呑み込んだ。女の傍らで泣いているダーマンのチョッキのうえに汚らしく箱を吐き出し、数時間後には落ち着きを取り戻しが、それ以来、この愛の男は、悲運の男と称されるようになってしまったのである！ ダーマン自らカルロスに語つたところによれば、こうした悲劇をたくさん経験すると、怖くて怖くて女を見つめられなくなるらしい……

「シユザンヌともひと悶着あつたしなあ！」しばらく黙つて唇のささくれを探してから言つた。

そしてため息をひとつつくと、ダーマンはまた『フィガロ』を手にとつた。テラスにはふたたび静寂が戻つてきた。室内ではまだチェスが続けている。パラソルの日陰の外では日差しがますます強くなり、石や、明るく金色に輝く白磁の花瓶に容赦なく降り注いでいた。花瓶では、満開のカーネーションの周りを季節最初の蝶がひらひらと舞っている。下では庭園が緑に萌え、光のなかでその動きをびたりと止めて、枝さえそよとも動かない。噴水の水音と水盤の水のきらめきが涼を運び、薔薇の黄色や赤、最後の椿の鮮紅色が、庭の緑に活気を与えている。建物の間から見える川の一部は空と同じ濃紺で、川と空の間には山が深緑の太い帯となって割り込んでいくが、その深緑は陽の光を浴びて黒々と見えた。山の上には止まつたままの風車。山の下には小さな白い家が二軒。家は歌うように輝いて、まるで生きていくようだ。日曜日の眠くなるような安らぎが辺りを包み、繰り返される鐘の澄んだ音が空高く流れていく。

「ノーフォーク公がパリに着いたぞ」とダーマンは事情通のよう

ルロス」

カルロスは雑誌から目を上げないまま、天に向かうジェスチャーでその「粹」^{シツク}がいかに広大無辺か表現した。

ダーマンは『ファイガロ』を投げ出すと葉巻をホルダーに差し込んだ。ベストのボタンを全部外し、伯爵の宝冠の下にある巨大なSという文字がよく見えるようにシャツをぐいと引つ張ると、脛を閉じ、唇を突き出し、勿体をつけて吸い口を吸い始めた：

「ダーマン、今日はあんた、ずいぶんいかしてるじゃないか」とカルロスが言った。カルロスも雑誌を放り出して、ダーマンをメランコリックな眼差しで見ている。

サウセデは嬉しくて顔を赤らめた。靴のエナメルと肌色の靴下に視線を這わせると、眼窩に収まった碧い眼を今度はカルロスに向けた。

「体調はいいんだが：… ちっとも感動^ブがなくてな」

そう言うことから、言葉どおり無感動^ブな態度で立ち上がると、新聞と葉巻を置いたそばの庭用テーブルに行った。「この国で起きたことを確認するために、『ガゼタ・イルストラダ』⁽⁸⁾に目を通そうというのである。雑誌に目をやったとたんにダーマンが叫んだ。

「またデビユーか？」とカルロスが訊く。

「いや、あの野郎、カストロ・ゴメスのことだ！」

『ガゼタ・イルストラダ』はこう報じていた。「ブラジルの紳士、カストロ・ゴメス氏は、ブラサ・ノーヴァで起こった不幸にさいし献身的な犠牲となられたが(この件については当方の特派員 J. T. が詳細にわたって忠実に伝えている)、このたび健康を回復し、ホテル・セントラルに投宿中の模様。この大胆な紳士にはわが社より祝福を送りたい」

「陛下はご回復なさったそうだ」とダーマンが、雑誌を脇に放り投げながら大声で言った。「なるほど、なるほど。となると今度はおれが思っていることを面と向かってぶちまけてやる番だ。あの恥

知らずめ！」

「ちよっと大きじやないか」。雑誌をひったくると、記事を再読したカルロスは呟いた。

「大きだつて？」ダーマンは立ち上がって叫んだ。「そうおっしゃるなら教えて進ぜよう。もしおれだったら、きみだつてどんなに：… あいつは野獣だ！ 野蛮人だ！」

そして、自分の心を傷つけた例の出来事を、もういちどカルロスに語ってきかせた。あれはポルトから着いたときだった。カストロ・ゴメスがホテル・セントラルに投宿してすぐ、二度ばかり名刺を置きに行ったんだ。二度目はエーガのディナーがあった翌日だった。ところが陛下ときたら訪問にお礼も言ってくださらない！ その後、夫婦はポルトに発った。そのポルトでカストロ・ゴメスがひとりでブラサ・ノーヴァを散歩しているときだ。見ると、小型四輪馬車の二頭の馬のはみが外れて、お嬢さんがふたり叫んでいる。ゴメスは馬のはみに飛びついて止めようとしたが、突き飛ばされて格子に当たり、腕を脱臼したつて次第だ。こうして、ポルトのホテルに五週間いるはめになった。おれは(例によって奥方に目をつけていたからだ)すぐに電信を二通送ったよ。一通は、同情と遺憾の意を伝えるもの。もう一通はどうしているか連絡が欲しい旨伝えるものだった。あの野郎、どちらにも返事をよこさなかった。

「だめだ。許せん」テラスを行ったり来たりしながら、この侮辱を思い返しては声を上げた。「思い知らせてやる。どうやったらいかまだわからんが、きつと痛い目に合せてやる：… こんな侮辱、相手がだれだろうと許すことはできない。誰だろうと！」

このとき室内から書齋のドアが開く音が聞こえてきて、ほとんど間を置かずにエーガが現れた。狼狽し、慌てたようすである。

「やあ、ダマソジーニョ！… カルロス、ちよっと下で話があるんだが、いいか？」

ふたりはテラスから階下に降りると庭に入り、満開のハナズオウ

のそばまで行った。

「金あるか？」エーガはじりじりしてすぐに訊いてきた。

そして、えらく面倒なことになって、と語り出した。じつは明日が期限の手形が九十ポンド分あるんだ。そのうえ、エウゼビオジーニョに二十五ポンドの借金がある。あいつ、恥知らずな手紙を書いて要求してきやがった。というわけでおれは今絶望の淵にいる……

「あの悪党には支払わなきゃならん。今度あいつの顔を見たら、その面に唾で手紙貼っつけてやるわ。その他に例の手形だ！ 全部で十五トスタン……」

「エウゼビオジーニョは杓子定規な男だからな…… じゃ、全部で十五ポンドでいいんだね」とカルロスが言った。

エーガは顔を赤くしながらもじもじした。カルロスにはすでに借金があるのだ。無尺蔵の金庫のように、いつもこの友情にすぎることになってしまふ。

「いや、八十でいい。腕時計を質屋に入れるから。それと毛裏付きの外套も入れる。もう寒くないし……」

カルロスは微笑み、小切手を書きに部屋へ昇っていった。そのあいだエーガは、フロックコートに飾る薔薇の薔を慎重に選んでいる。まもなくしてカルロスが戻ってきた。手には百二十ポンドにもなる小切手を持っていた。エーガの武装用だ。

「神の祝福があるように！」エーガはそう言うと、小切手をポケットにしまつて、大きく安堵のため息をついた。

すぐにでもあの守銭奴野郎エウゼビオジーニョに派手な攻撃を仕掛けてやるからな。ただ、復讐の計画は以前からすでに練っていた。返済金を全額銅貨にして炭袋に入れ、そこにネズミの死骸を入れて、「吐き気を催すミミズと汚らわしいヤモリをお前の顔に投げつけてやる云々」で始まるメモを放り込んでやるうというのである。

「あんな不愉快なやつがおまえの椅子を使ったり、おまえんちの

空気を吸ったりして平気でいられるなんて、その神経がおれにはわからない……」

しかし、エーガはエウゼビオジーニョのことを口にしただけでも穢れそうな気分だった…… そこでカルロスの著作、偉大な著書について尋ね、次いで自分の『原子』についても語ると、最後に自分の片眼鏡をカルロスにかけて、がらりと口調を変え、こう言った。

「ところで、なあ。どうしてゴウヴァリーニョ家に行くの止めちゃったんだ？」

カルロスにはその理由がひとつしか見つからなかった。楽しくないからである。

エーガは肩をそびやかした。エーガからすると、カルロスは子どもだとしか思えない……

「なんにもわかっちゃいないんだなあ」とエーガは大声で言った。「あの女、おまえにぞっこんだぞ…… おまえの名前を口にしただけで、顔真っ赤にしてるんだから」

とても信じられないといった顔でカルロスが笑うので、エーガはすこぶるまじめに、誓ってもいい、と言って語り始めた。おれはバルザックじゃないし、鋭い観察眼を持ってもないが、ものほきちんと見える方だ。あの女は、顔にも眼にも、誠実な思いがはっきり表れている……

「いいか、絵空事なんか言つてないからな…… おまえことが好きなんだよ、ほんとうに！ おまえさえその気になりゃ、ありゃいっただつて落ちるぞ」

宗教や道徳や社会や家庭の法がどんなに広大無辺でも、それを打ち破ることができると考えているエーガのメフィストフェレスぶりが可笑しかった。

「いいよ、わかったよ」とエーガは叫んだ。「そっちがそうして道徳の教科書だの法令集だのくだらんものを持ち出してくるんなら、この話はもう終わりだ！ 貞淑の疥癬を移されて、なんでもかんで

もそう痒がっているようじゃ、男としちゃ終わりだな。トラピスト修道院に入って『伝道の書』に注釈でもつけてりゃいい」

「いや違うんだ」テラスの怠惰な気分がまだ抜けきらないカルロスは、木の下のベンチに座って言った。「ぼくの理由はそんな高級じゃない。あの家に行かないのは、ゴウヴァリーニョが退屈だからだ」

エーガは黙ったまま微笑んだ。

「夫が退屈だからって、いちいち奥さんから逃げ出していた日にか……」

カルロスの傍らに座ると、エーガは地面の砂に黙って何か描きながら、憂愁を帯びた声でぼつりぼつりと話し始めた。

「おとこの夜は、十時から一時まで、国立銀行の訴訟についてたつぷり聞かされたよ！」

それはまるで打ち明け話だった。コアンの生きている世界で、芸術家の精神がいかにがき苦しんでいるか、うんざりするような秘密を吐露されたのである。カルロスは同情してほろりとなった。

「かわいそうに。それじゃ最初から最後までずっと訴訟の話か？」

「ずっと。しかも総会の報告書の朗読までつきあわされたんだぞ！ 興味津々の顔して聞いたよ。意見を言ったりしてね…… 人生は地獄さ」

ふたりはテラスに上がっていった。ダーマソは柳の枝で編んだ椅子に腰かけ直し、螺鈿をあしらったポケットナイフで爪の手入れをしているところだった。

「決まったか？」すぐエーガに訊く。

「昨日決まった。コテイオンはなし」

ラケルの誕生日にコアン家で催されることになっている大々的な仮面舞踏会の話だった。この舞踏会を発案したのはエーガで、最初は、ドン・マヌエル時代の歴史的な夜会を模した大規模な芸術的祭典にするつもりだった。しかし実際のプランはもっと慎ましいもの

に縮小し、銘々が好き勝手に仮装するたんなる仮装舞踏会になってしまった。

「なあカルロス、もう衣装は決めたか？」

「頭巾つきマントだな。科学者にふさわしい黒い簡素なドミノ……」

「科学者か」とエーガが叫んだ。「それなら裾の短いフロックコートとリボンのついたスリッパにしろよ…… ドミノを着て宇宙の法則を発見するやつなんかいないぞ…… なんてつまらん発想だ、ドミノなんて……」

ちょうどラケル夫人も、自分の舞踏会では、そのつまらないドミノはなるべく避けて欲しいと言っていた。こうしてカルロスはドミノを着る口実を失ってしまった。たかだか二・三十ポンドに恋々とする男ではない。しかもルネサンスの騎士のようなまばゆい肉体をもっている。少なくともフランソワ一世のような立派な姿で会場を彩らなければならぬだろう。

「そこにこそ」エーガは熱く言って続けた。「そこにこそ仮装夜会的美が存するわけだ！ そう思わないか、ダーマソさん。各人、己の姿を活用しなくちゃいけない…… たとえばゴヴァウリーニョ夫人なんかきつといいぞ。インスピレーションがあったからな。あの赤毛と低い鼻、張り出した頬骨。まるでマルグリット・ド・ナヴァールだ……」

「だがマルグリット・ド・ナヴァールだって？」クラフトとテラスに現れたアフォンソ・ダ・マイアが訊く。

「マルグリット、アングレーム公爵夫人にして、フランソワ一世の姉にして、マルグリット中のマルグリットにして、ヴァロワの真珠にして、ルネサンスの庇護者にして、ゴウヴァリーニョ伯爵夫人」

エーガは呵呵大笑するとアフォンソを抱きしめ、コアンの舞踏会について話し合っていたところだと説明した。そしてカルロスの不吉なドミノについてアフォンソに、次いでクラフトに意見を求め

た。戦士のような風貌のこの偉丈夫は、マリニヤンの戦いの栄光さなかの威風堂々たるフランソワ一世のために彫琢されているとは思いいなりませんか？

祖父は美しい孫にしみじみと見入った。

「ジョンよ、たしかにきみの言うとおりかも知れん。だがな、フランソワ一世はフランスの王だ。ほろ馬車から降りるわけにはいかないし、ひとりで広間に入るわけにもいかない。宮廷や、先触れや、騎士や、貴婦人や、道化師や、詩人が必要だ。うちじゃどれもこれもがむずかしい」

エーガはお辞儀をした。お説御尤も。そのとおりでございます。これこそコアンの舞踏会を知的に理解する方法ですな！

「で、あなたはどうするんだね？」とアフオンソが訊いた。

それは秘密です。こうした宴会の魅力のひとつにはサプライズがある、というのがわたしの持説ですから。たとえばジャケット姿と一緒にホテル・ブラガンサの夕食を食べていたふたりの家臣が、ひとはシャルル五世のインペリアル・パープルを着て、もうひとはカラブリアの盗賊のラッパ銃兵の姿で、夜再会するという仕儀ですわ…

「わたしは秘密なんかにしないぞ」。騒がしい声でダーマソが言う。「わたしだったら未開人になるな」

「素っ裸の？」

「いや、『アフリカの女』¹²のネリユスコですよ。ねえ、アフオンソさん、どうお思ひになります？ 粹^{シツ}でしょ？」

「粹^{シツ}というのはちと違うな」とアフオンソは微笑んで言う。「莊重^{シツ}でも言ったらいいか」

クラフトがどんな仮装をするのかみんな知りたがった。ところがクラフトときたらまったく仮装をするつもりがなかった。部屋着でオリヴァイスに立っているという。

エーガは肩をすくめた。うんざりして腹まで立つてくる。コアン

の舞踏会にこんなに無関心だなんて、これはもうコアンに対する個人的侮辱だ。こちららこんなに時間を割いて、図書館で調べものまでして、頭から湯気が出るほど想像力を使っているのに。それに、ひとつの町がこんなにも才能を発揮できるのだという証拠になるほど重要な芸術的祝賀になりそうだというのに。ドミノ¹³や仮装放棄は精神劣化の明らかなき兆候だよ。ゴウヴァリーニョなんか見てみろ、もうじき大臣になりそうな政治的地位にあるのにじつに熱心で、舞踏会も参加するだけじゃなく、衣装をしきりに研究して、研究のはてにびつたりの仮装を考え出している。ポンバル侯爵¹⁴の仮装だ！

「大臣になるための宣伝活動だよ」とカルロスが言う。

「あの人に宣伝なんか必要ないよ」とエーガは大声で言った。「大臣になる条件ならぜんぶ揃ってるんだから。声はよく通るし、モリス・ブロック¹⁵は読んでるし、借金はしてるし、愚かだし…」

しかし、みんなが爆笑したので、コアンの舞踏会に関心をもつ紳士をこうして傷つけてしまったことを後悔して、付け加えた。

「だけどゴウヴァリーニョはじつに善良な若者ですよ。威張ったりしないし！ 天使ですよ！」

アフオンソは父親が息子を矯めるように笑いながら言った。

「おいおいジョン、きみはなにも尊敬しないんじゃないか？ なかったのか…」

「アフオンソ・ダ・マイアさん、冒瀆は進歩の必須条件です。尊敬する者は衰弱する。まずゴウヴァリーニョに感嘆します。すると人はついつつかり君主に敬意を抱いてしまう。最後には、そんなつもりはまったくないのに全能の神を崇めてしまう、というわけです…！ 気をつけなければなりません！」

「去れ、ジョンよ、去れ！ おまえはアンチ・キリストそのものだ」

エーガが得意の反論を怒涛のごとく展開しようとしたそのとき

だった。室内で、ルイ十五世時代の時計の銀鈴のような澄んだ音が優しいメヌエットのよう響き、エーガは開きかけた口を閉じた。

「なに？ 四時だつて？」

びっくりし、自分の時計で時刻を確かめると、黙ってさっさと握手をしてまわり、風のように去って行った。

残された者も茫然としていた。こんな時間になってしまった！メデイロスさんの古いベッドカバーを見にルミールに行く時間はもうとつくに過ぎていた。

「それじゃあクラフト、三十分ばかりフルーレをやらぬか？」とカルロスが訊いた。

「いいねえ。ダーマソにもレッスンを付けてやらなきゃな……」

「ええ、まあ、レッスンはいい……」とダーマソは気乗りしないようにうすうす元氣なく微笑んだ。

フエンシング場は地下にあった。カルロスの部屋がいくつかぶんで連なつた場所の階下で、庭に面した窓には格子が入っており、薄緑色の木漏れ日が差し込んでくる。霧が立ち込める日には四つのガス灯に火を点けなければならなかつた。ダーマソはびくびくした牛のようにそろりそろりと二人の後をついて行く。

粹への愛からダーマソが頼んでいたレッスンだが、その本人にとっては不愉快極まりなかつた。この日の午後は、いつものように猿の皮でできた胸当てをつけ、真鍮製のマスクを被つただけで、たちまち汗が噴き出し、顔が真っ白になつた。フルーレを手にして目の前に立ちはだかるクラフトが、沈着冷静なヘラクレスのような肩と、明るく冷たい眼をした残酷な野獣のように見える。二本の剣先が擦れ、ダーマソはがたがたと震えた。

「しつかりしろー」カルロスが叫ぶ。

不幸な男は太つた脚のうえてゆらゆら揺れていた。クラフトのフルーレがダーマソの上で揺れ、輝き、舞う。ダーマソは息を切らして退き、よろめき、手がだらりと垂れた……

「しつかりしろー」カルロスが怒鳴っている。

ダーマソは疲れ切つて剣を下ろした。

「いったいおれをどうしようつての？ まったく神経に障るわ。冗談のつもりか……もし本気だしたら、いつか見てろよ」

レッスンはいつもこんなふうになるのだった。そしてモロッコ革のベンチにへたり込んで、壁のモルタルのように蒼白い顔をハンカチで煽ぐ。

「ぼちぼちうちに帰るわ」。さんざん剣を交えて疲れたダーマソは、しばらくしてから言った。「なにかして欲しいことはあるかい、カロリーニョ？」

「明日の夕食はぜひうちで食べて欲しい……侯爵が来るんだ」

「そりや本当に粹だ……ぜったい行くよ」

ところがダーマソは来なかつた。そしてその週はまるまる、あの律儀な若者がラマリエーテに姿を見せなかつたので、死にそうになつていたのでないかと心配になり、カルロスは午前中にラパの自宅を訪れた。しかし使用人（マイア家との関係ができて以来、ダーマソが燕尾服のなかに押し込み、エナメル靴でぎゅうぎゅう抑え付けていた、がさつで陰鬱なガリシア人）は旦那さまのダマソジーニョはいたつて健康で、乗馬もなさるほどだと太鼓判を押した。そこでカルロスはアブラハム爺さんのところに行つたが、爺さんも、あの善良なサウセデさま、「あの見目麗しい紳士」はここ数日來お見かけしておりません、ということだった。カルロスはしきりに首をかき上げながらクラブ・グレイミオにも寄つてみたが、グレイミオの使用人はだれひとり最近サウセデ氏の姿は目にしていないらしい。「さしずめどこかのアンダルシア女と蜜月を楽しんでいるのだろう」カルロスはそう考えた。

アレクリン通りが終わるあたりに差し掛かつたときだった。カルロスはアテロ方面に歩いてゆくステインプロケンの姿を見かけた。自家用ツーパーター四輪馬車がのろのろ後をついてくる。この外交

官が不幸な内臓疾患に襲われて以来、外を出歩くのはこれが二度目だった。しかし病気の痕跡はすっかり消えている。顔は赤みを帯び、髪は金色に輝いていた。がっしりとした体躯を丈長のフロックコートが包み、ボタンホールには紅茶色の美しい薔薇を挿している。自ら語るところによれば「いぜんにもましてつ・お・く」になったのだという。しかもこの災難を嘆いてばかりいるわけではなかった。これを機会に、どんなに心を寄せてくれる人がリスボンにいるか、しみじみとわかったからである。ステインブロケン^{Steinbröcken}は人々の情にほろりとときていた。とりわけ外務大臣閣下の御配慮——閣下の尊い御配慮——は、「薬局のどんな薬よりも」病身に効いた。事実、ポルトガルとフィンランド両国のかくも緊密な関係が「わたしが内臓疾患になっていた期間ほど、い・あ・ば、堅固で親密であつたときはなかった」のだ！

それからカルロスの腕を取ると、アフオンソ・ダ・マイアからの申し出がとつてもありがたかつたことを、遠回しにそれとなく話題にした。ドウロ川の濃く、澄んだ空気は健康回復にもつてこいだからと、サンタ・オラーヴィアを自由に使うようおっしゃつてくださったのですが、このお招きは、ああ、「オ・プリユ・プロフォン・ドウ・ソン・クール（心の奥底に）」沁みました。ただ、いかんせん、サンタ・オラーヴィアは遠い。あまりに遠い。そこで、週に一・二度公使館の監視のために毎週行くことのできるシントラで満足しなければなりません。「セ・タンニユイユ・メ：（退屈でした、でも…）」ヨーロッパがこうした危機的な状況にあるなかで、政府関係者や外交官が遠くに行つたり、わずかなりとも休暇を取ることは叶いません。つねに臨戦態勢で観察と情報収集をする必要があるのです。

「セ・トレ・グラウヴ（たいへん深刻な事態です）」ステインブロケン^{Steinbröcken}は、その青い眼に漠たる恐怖心を宿して立ち止ると、そう呟いた。「セ・テクセイヴマン・グラウヴ（並外れて深刻な事態で

すー）」

カルロスさん、少し周囲を見渡して、ヨーロッパがどうなっているかご覧になってみてください。どこもかしこも混乱ですよ。紛糾^{ガシ}ですよ。こちらでは東方問題…… あちらでは社会主義。そのうえ法王がすべてをややこしくしている…… ああ、トレ・グラウヴ（まったく深刻です）……

「トウネ・ラ・フランス・パル・エグザンプル（よろしいですか、例えばフランスです）…… トウ・ダポール・ガンベッタ（まずはガンベッタ）。オー・ジュ・ヌ・デイ・パ・ノン（いや、否定しようにありません）。イレ・フォール（あれは手強い）。イレ・テクセツイヴマン・フォール（並外れて手強い）…… メ（で）…… ヴォワラ（結局）…… セ・トレ・グラウヴ（とても深刻なのです）」

その一方では過激派たち、これが新たな社会階層^{ソシヤル・クラッセ}になつていて…… これも並外れて深刻だという……

「トウネ（よろしいですか）。ジュ・ヴェ・ヴ・ディール・ユヌ・シヨーズ（ひとつこんな話が）。アントル・ヌ（これはだれにも言わないでいただきたいのですが）」

しかしカルロスは話を聴いてもいなければ、微笑んでさえいなかった。アテロの外れから、ひとりのご婦人が急ぎ足でこちらに近づいてきたからである。地上に降り立った女神のようなあの歩き方。スカートのまとわりつく銀色の牝の子犬。古代の大理石のように豊かな線の下で優雅に力強くうねるあの官能的な肉体の魅力。カルロスはすぐにわかつた。あの女だ。全身黒づくめだった。その質素なサージのドレスは、婦人の人柄を自然に補い、ぴつたりと体を包んで、真つ直ぐななかにも純粹で力強い雰囲気を与えている。手にはイギリス製の日傘をもつていた。きゅつと細身に締めて、まるでステッキのようだ。こうして輝く夕陽に包まれて歩くその姿は、さびれた町の侘しい波止場を背景にすると、全身が奇妙に浮き出ている。さながら高度な文明の洗練の極致であつた。しかし、カル

ロスはその顔を細部にわたって捉えることができなかつた。象牙色に輝く肌にあつて、わずかに捉えることができるのは、こちらをじつと見つめる黒く深い眼だけ。カルロスは婦人の後を追おうと無意識に足を一步踏み出した。傍らでは、これに気づいていないステインブロケンが、ビスマルクは恐ろしい男だと言っている。婦人は遠ざかるにつれ、より大きく、より美しく感じられ、地上を歩く女神という虚構の文学的なイメージが、カルロスの想像力を捉えるのだった。ステインブロケンはドイツ国会議事堂における首相の演説に相変わらず怯えていた。そうだ、あれは女神なのだ。帽子の下で三つ編みを巻き上げた栗色の髪がその色を覗かせている。夕陽を浴びてほとんど金色に見えた。傍らでは子犬が耳をぴんと立て、駆け回っている。

「もちろん」とカルロスは言った。「ビスマルクは物騒な男です。」

しかし、ステインブロケンはもうビスマルクの話をしていなくなつた。ピーコンスフィールド卿の攻撃に移つていたのである。

「イレ・トレ・フォル（あれはじつに手強い）： ジュ・ヴ・ラコルドゥ（おっしゃるとおり）、イレ・テクセツスイヴマン・フォル（並外れて手強い）： メ・ヴォワラ（でも、結局）： ウ・ヴァティル（あいつがどうなるのか）」

カルロスはカイス・ド・ソドレの方を眺めていた。だがあたりはいずれも寂寥としている。ステインブロケンは病気になる前も外務大臣に同じことを言っていなかつたか？ ピーコンスフィールド卿は手強い。これからどうなるのか、と。いったいステインブロケンはなにが言いたいんだ？ しかも外務大臣は肩をすくめていたし：

「外務大臣はなに知らないらしい：
「エー・ウイ（いや、そうなんです）！ ピーコンスフィールド・エ・トレ・フォル（ピーコンスフィールド卿はじつに手強い）
： ヴ・ザヴェ・リュ・ソン・スピーチ・シエール・ロールメー

ル（あの男が市長宅でしたスピーチをお読みになつたことがありますか）？ エパタン（それがすごいですよ）、モン・シエール（カルロスさん）・エパタン（ものすごい）！： メ・ヴォワラ（でも、結局）： ウ・ヴァ・ティル（あいつがいったいどうなるのか）？」

「ステインブロケンさん、うかつにもアテロくんだりにぐずぐずして、体を冷やしてしまつたらよくありませんよ：」

「そうですか？」慌ててお腹と下腹に手を当て、外交官は大声で言つた。

「また夕食にいらしてくださいよ、ステインブロケンさん」

「シャルメ（光栄です）、モン・シエール（カルロスさん）、シャルメ（光栄です）」

ヴィトリアは走り出した。そして外交官は、スコットランドの毛布で脚とお腹を包むと、こう加えた。

「それにしてもマイアさん、良い散歩でしたね： ただあのアテロはあまり楽しいところではありませんな」

アテロが楽しくないだつて！： 今日午後、アテロは地上でいちばん魅力的な場所だつたのに！ カルロスはそう思った。

翌日、カルロスは前の日より早い時間にアテロに出かけた。そしてアテロに入つてすぐ、ほんのしばらく歩いただけで、木々のあいだに女の姿をみつけた。しかしその日はひとりではなかつた。横には夫がいた。生成り色のカシミアのジャケットを着て、ダイアモンドをあしらつた馬蹄形のタイピンで黒いサテンのネクタイを留めている。洗練された盛装だ。物憂げに、そして所在なげに煙草を喫い、手には雌の子犬を引いている。通りがかりに、不意を衝かれたようにカルロスを見遣つた。野蛮人のあいだに文明人の姿をした人間がやつと見つかった、とても言いたげな眼だつた。そして妻に二

言三言なにかを囁いた。

カルロスは女と再び視線を交わした。深く厳肅な眼だった。しかし今度はそれほど美人だとは思わなかった。昨日とは違う、もっと質素な、鉛色とクリーム色のツートンカラーの服を着て、イギリス風の大きなつばの帽子を被っている。その帽子には、花だろうか羽根だろうか、なにか赤いものがあしらわれていた。その日の午後は、遙か彼方の海上でもくもくと立ち上がった金色の雲から降り立った女神ではなく、ホテルに帰ってきたただの美しい外国婦人だった。

それからさらに三度、カルロスはアテロを訪ねたが、女とはついに再会できなかった。こうしてロマンチックな好奇心に駆られ、ロイヤル・メイルの定期船が運んできて、たまたまりスボンに立ち寄っただけの黒い眼と金色の髪に出会えないかと、アテロのランバ・デ・サントスからカイス・ド・ソドレまで、野良犬のように必死で嗅ぎまわっている自分が恥ずかしくて惨めになった。

しかも、その週は書齋での仕事をすべて放り出し、午後ともなると出かける前に決まっていたつまでも鏡のまえに陣取って、ネクタイをとっかえひっかえ引っ張り出してくる始末。なんと惨めなやつだ：

その週末のことだった。カルロスが診察室で手袋をはめ、帰宅の準備をしているとき、召使いがやってきて仕切りの緞帳を少し開け、慌てたようすでささやいた。

「「婦人です！」

現れたのは、金髪がくるくると巻いた蒼白い顔の男の子だった。黒い天鵝絨ビロードの服を着ている。その後ろから女がやってきた。全身黒づくめで、顔には覆面のように厚いベールをきつく巻いている。

「もう終わりのお時間だったかしら」女は戸のそばでためらいがちに言った。「カルロス・ダ・マイアさん、ご帰宅なさるごようすですものね…」

カルロスは女がゴウヴァリーニョ夫人であることに気づいた。

「ああ、伯爵夫人！」

カルロスはすぐにソファの新聞や小冊子を片付けた。ゴウヴァリーニョ夫人は後宮風の広くて柔らかな椅子をしばらくぼんやりと眺めていたが、その端に浅く腰かけ、男の子も隣に陣取った。

「病人を連れてまいりました」ヴェールも取らず、体を包み隠す黒い服の奥底から聞こえてくるような声で言った。「往診をお願いしなかったのは、たいした病気ではありませんし、どうせこのあたりを通ることになっていましたから…それに、息子は癩がたいへん強くて、部屋に医者でも入って来ようものならそれこそ死にそうなる騒ぎになりますものだから。こうすればただ訪問しているようなもので…怖くないものね、チャーリー？」

男の子は返事をしなかった。天使のような巻き毛が肩までかかったひ弱そうな子だ。微動だにせずママの傍らに立ったまま、大きく悲しそうな眼でカルロスを負るように見つめている。

カルロスは優しい声で尋ねた。

「どうしました？」

数日前から首におできができていてしかも耳の後ろには固いよこねがあるんです。心配なのはこれで私自身は身体が丈夫で、百歳まで生きる運動好きな家系ですが、夫ゴウヴァリーニョの家系は生来みな虚弱で、伯爵自身も、頑健そうな外見とは裏腹に病弱なんです。リスボンの気候がチャーリーの身体によくないのではないかと、祖母の家がある田舎のフォルモセーリャで息子をしばらく過ごさせたらどうかと…。

カルロスは椅子を少し近づけると、チャーリーの腕を取った。

「さあ、かわいい坊や、こっちにおいで。ちよっと見せてね。坊やの髪、なんてきれいなんだらう、ねえ、おかあさん！」

伯爵夫人は微笑んだ。チャーリーはまじめな顔でおとなしくしていた。母親が言っていたように医者に怯えることもない。すぐに進

み出るとシャツのカラーのボタンを外し、カルロスの膝のあいだに割り込まんばかりに近づいて、柔らかく白い首を百合のように折り曲げた。

カルロスの眼に映ったのはわずかに、消えかかったばら色の小さな斑点だけ。よこねは痕跡すらない。と、そのとき、カルロスの顔は上気し、ほんのり朱く染まった。なるほど。子どもじみた口実をつくり、こんな黒い服を着て、こんなヴェールで顔をすっぽり覆ってまでして、この人はここに来たのだ。カルロスは伯爵夫人の眼を貪るように見て、そこに真意を読み取ろうとした。

しかし夫人の眼はなにも語っていなかった。ソファに浅く腰かけ、腕組みをしたまま、母親らしくいささか不安げなようすでカルロスの診断を待っている。

カルロスは、男の子のカラーのボタンをはめてから言った。

「奥さん、まったく心配には及びません」

それでも医者としてひととおりのことを訊いておこうと、チャーリーの養生と体質について尋ねた。伯爵夫人は悲しそうな顔で打ち明けた。息子の教育は自分の思い通りにいっておりません。私としては息子がもっと強く男らしく育って欲しいと思っているのに、あの子の父親ときたら、冷水だの、戸外の運動だの、体育だの、あの人が「イギリス式無分別」と呼ぶものに反対して……

「冷水や運動は」と微笑みながらカルロスが言った。「世の中で言われているほどのものではありませんよ……ところで伯爵夫人、お子さまはおひとりですか?」

「ええ、世間の一人っ子なみに甘やかされております」男の子の金色の髪を手で梳きながら言った。

チャーリーは一見繊細で神経質そうだけど、心配はいらない、良い空気を吸わせようと、家から追い出してわざわざフォルモゼーリヤくんたりまで行かせる必要などない、とカルロスは請け合った。そこでふたりのあいだにはしばらく沈黙があった。

「そう言っていたらどんなに気持ちが悪いですか」伯爵夫人は立ち上がってヴェールを直しながら言った。「それにこんな気持ちの良いところで診ていただいて……ここには病人の匂いも、薬の匂いもありませんのね……ほんと、すてきですわ……」診察室の壁を覆う天鵞絨をゆつくり眺めまわしながら言った。

「まさにそこが問題でなんですよ」とカルロスは強い調子で言った。「これじゃあわが医学にたいする敬意をいささかも抱かせてもええせんからね……すっかり模様替えをして、剥製の鱧や梟や角のある動物とか、骸骨とか、二つ折りの本の山なんかを置こうかと考えています」

「ファウスト博士の部屋みたいですね」

「まさに、ファウスト博士の部屋だ」

「メフィストフェレスが必要ですわね」伯爵夫人はヴェールの下で眼を輝かせながら楽しそうに言った。

「わたしとしてはマルガレーテが!」

あらほんとうに? とでも言うように伯爵夫人は肩をそびやかした。きれいな仕草だった。それからチャーリーの手を取ると戸口に向って一歩あゆみを進めると、もういちど身だしなみを整えた。

「奥方さまは私の部屋にご興味があるようすですので」伯爵夫人を引きとめようとカルロスは言い足した。「もうひと部屋紹介させていただきます」

カルロスは仕切りの緞帳を上げた。夫人はカルロスのそばに寄ると、クレトン生地が爽やかで、明るいツートンカラーがすてきだと短く囁いてから、ピアノを見て思わず顔をほころばせた。

「患者さん方、カドリールでもお踊りになるのかしら?」

「伯爵夫人」とカルロスはゆつくり答えた。「私には、カドリールが組めるほどの患者がおりません。ワルツだつてつたにできないほどです……ピアノはただ楽しい雰囲気を出すために置きました。問わず語りに健康を約束するためです。いずれまた夜会が楽し

めますよ。また家族に囲まれて『イル・トロヴァトーレ』¹⁸のアリアが歌えるようになりませよ、と」

「なかなかうまいお考えですわね」伯爵夫人はそう言って、部屋を気兼ねなく歩きまわった。チャーリーは母親の服にしがみついている。

カルロスは夫人の傍らを歩きながら言った。

「私が物事をどんなにうまく考える男か、奥方さまはご存知ありませんでしたっけ？」

「このあいだもたしか仰ってましたわね… あら、なんて仰ったんですしたかしら？ ああ、そうだわ。嫌いなときほどうまく考えるるって」

「好きなときよりもはるかにうまく」と、笑いながらカルロスは言う。

だが伯爵夫人はそれには応えなかった。ピアノのそばで立ち止まると、散らかった楽譜にしばらく触れ、それからピアノの鍵盤を叩いて音をふたつ出す。

「なんだかカウベルみたいな音ね」

「ああ、伯爵夫人！」

伯爵夫人は続けて部屋を見まわすと、一枚の油絵を上げしげと眺めた。ランドシア¹⁹の複製画で、足を前に出して眠っている大人しくてお人好しのセント・バーナード犬の顔を描いている。伯爵夫人は服にふれそうなほどそばにいた。夫人がいつも浴びるように使っているタマツヅラの香水の上品な薫が漂ってくる。そして、夫人を包むその黒い服から覗く肌は、いつもよりいっそう明るく、いっそう優しく、まるでサテンのように蠱惑的に見えた。

「これはいや」と、伯爵夫人はふり向きざまに小声で言った。「でもエーガさんが仰ってらしたけど、ラマリエーテにはずいぶんきれいな絵があるんですって… とくにグルーズとルーベンスの絵についてお話になってました… そんな素晴らしい絵があるのに、見る

ことができないうんてつらいわ」

独身生活を送っているものですから、残念なことに、わたしも祖父も、既婚のご婦人方を家にお迎えすることができないんです。ラマリエーテは僧院のように陰鬱になりはじめております。ドレスの熱気も、女性の芳香も知らずにこのまま数か月たてば、床の絨毯からはべんべん草が生えてくるでしょうね。

「そんなわけで」とカルロスは真顔で言い足した。「ぜひ祖父を結婚させようと考えている次第です」

伯爵夫人は笑った。黒いヴェールを通して、きれいな可愛らしい歯がこぼれた。

「カルロスさんの陽気ところが好き」と夫人は言った。

「養生の問題です。奥方さまだって陽気ではないですか？」

そうかしら、とても言わんばかりに夫人は肩をそびやかした。それから、明るい色の絨毯のうえで輝くエナメル革のブーツをパラソルの先でこつこつ叩きながら言った。

「そうかしら。だって私、陰気だ、鬱だって言われてますもの…」

カルロスの眼が伯爵夫人の眼を追い、ほっそりとした長い脚をきゅっと包み込むエナメル革のブーツにじっと注がれた。チャーリーはその間、ピアノの鍵盤にさわって遊んでいる。カルロスは声をひそめて言った。

「奥さまの養生に問題があるからです。うちにいらして診察、加療していただく必要がありますね。きつとご忠告できることがたくさんあると思います！」

伯爵夫人は、はっとしてカルロスを見上げると、熱のこともった声で、カルロスの言葉にかぶせて言った。その眼からは優しさとおびのきらめきが迸っている。

「そのまえに、ぜひ近々拙宅にいらして。お茶をご一緒にいかがですか。五時に… チャーリー！」

男の子はすぐにやってくるかと母親の腕にぶらさがった。

カルロスは伯爵夫人に付き添って通りまで降りながら、石の階段が無愛想で申し訳ないと漏らした。

「伯爵夫人にふたたびご来駕いただくまでには、ぜんぶ絨毯で覆うようにしておきますから…」

夫人は笑いながら冗談を言った。

「まあ、カルロス・ダ・マイアさんたら！ わたくしどもの健康に問題はないとおっしゃいましたよね… ということは、ここでお茶をご一緒する約束をわたしに期待なさるわけにはまいりませんわ…」

「ああ、奥さま、私はいったん期待し始めると止まるところを知らないのです…」

伯爵夫人は男の子の手を引いたまま立ち止ると、カルロスの自信に満ちた断言ぶりに驚き、魅惑されたように、カルロスを見た。

「じゃ、ほんとうに、ほんとうに、止まるところを…？」

「ほんとうに、ほんとうに、知らないのです！」
ふたりは最後の段まで来た。前が明るくなり、街路の雑音が聞こえてくる。

「馬車を呼んでいただけますか？」

カルロスが手を上げるとすぐに御者がぼろ馬車を止めた。

「それじゃあ今度は」と伯爵夫人は笑みを浮かべて言った。「グラサ教会まで行くように言ってくださるかしら」

「キリスト受難像の足下に接吻でもなさりに？」

伯爵夫人は頬をうつつらと赤く染め、小声で言った。

「いつものお勤めに…」

それから伯爵夫人はひとり身も軽く馬車に飛び乗った。おいてきぼりになったチャリーをカルロスは父親のように抱き上げ、母親の傍らに座らせる。

「神様のご加護がありますように！」

伯爵夫人は頭を軽く下げ、眼で感謝の意を伝えた。その仕草にも

瞳にも愛撫のような優しさがあつた。

カルロスはまた上に戻った。帽子も脱がず、待合室を歩き回りながら煙草の紙を巻く。いつもがらんとした寒々とした待合室には、かすかながら伯爵夫人のぬくもりと香りが残っていた：

カルロスは伯爵夫人のその大胆さに魅了されていた——チャリーの健康な首によこねまででつちあげ、黒づくめの服に隠れるようにしてこつそりと会いに来て、おれが放つておいたためにほどけそうになっていた関係の糸を、ああしていきなりぎゅっと結び直してゆくなんて：

エーガの想像力も今度という今度は暴走しなかったようだ。あの美しい体は服の上からでも裸のようによく見えるからな。ああ！

あの女が浮気な尻軽女ならいいのに——そうすればあの花を摘んで香りを味わい、そのあとでばいと捨てることだってできる！ いやだめだ。パプティスタも言っていたじゃないか、伯爵夫人はいちども遊んだことのない女だって。そもそも、嫉妬の嵐に翻弄されるなんてまっぴらだ。三十路女の深情けにはまると、なかなか抜け出せないし：女を腕に抱いているときだって心は冷えたままだろう。最初の好奇心が満たされればキスだってうんざり、もうしたくなく

なる。冷めた快楽の退屈さといったら、それはもう：それに家族と親しく付き合わなければならぬ。家に入っていけば伯爵から親しげにボンと肩を叩かれ、持説をぼつりぼつりと垂れる声に耳を貸さなければならぬ：そんなのうんざりだ：それにいても伯爵夫人の、あの大胆さはいい！ あそこにはいささかロマン主義がある。かなりふしだらで刺激的なロマン主義が：それに、きつとうつとりするような肉体の女だらう：カルロスの想像力は女の服を脱がせ、サテンのようなその曲線に包まれた。そこにはなにか成熟した、と同時に処女のような香りが漂っている：そして、あの赤みがかつて縮れた官能的な髪を、サン・カルロス劇場で伯爵夫人に出会った最初の夜の頃のように、ふたたび眼の前にするのだった

…
カルロスは外に出た。ノヴァ・ド・アウマード通りに入ってほんの何歩かあるときだった。カルロスは大速歩で突進する馬車クレベに乗ったダーマンをちらりと見かけた。てかてかに光った赤ら顔をドア窓から覗かせてカルロス呼びとめ、御者に停車するよう言っている。

「このところすっかりごぶさたしちやって」カルロスが手を出して近づいてゆくと、熱烈に握手をしながら言った。「嵐のなかにいるようでさ！ また今度話すよ… 神々しいロマンスだ… でも今度話すから！… 馬車には気をつけるよ！ カウサオン、行ってくれ！」

二頭立ての馬車は出発した。ダーマンはまだドア窓から身を乗り出したまま手を振ると、街の騒音のなか大声で怒鳴った。

「神々しいロマンスだ。ものすごく粋シツクだぞ！」

そのちよほど十日後のことだった。ラマリエーテのビリヤード室で、今しがた侯爵に勝ったクラフトが、キューを置いてパイプに火を点けながらこう尋ねた。

「われらのダーマンくんから音沙汰はあるかい？ あの嘆かわしい失踪の理由はもう糾明できたのか？…」

カルロスはそこで、ダーマンにはつたり出くわした話をした。ノヴァ・アウマード通りのど真ん中で、得意げな顔を真っ赤にして馬車のドア窓から身を乗り出し、「神々しいロマンス」と言っていたことを伝えた。

「それなら知ってるよ」とタヴェイラは言った。

「どうして知ってるんだい？」とカルロスは大きな声で訊いた。

タヴェイラは前日、ダーマンに会ったというのだ。コンパニーアでレンタルした大きなランドー型馬車に、まばゆいばかりの女性と乗っていたが、女性はとても洗練されていて外国人のようだったという。

「そりゃ驚いた」とカルロスは叫んだ。「で、雌のスコッチ犬を抱いていなかったか？」

「まさに雌のスコッチ犬だった。毛並みが銀色のグリフォン：ありやだれだいたい？」

「真つ黒の髭をたくわえた痩せた若者が一緒じゃなかったか？ ちよつとイギリス人風の」

「そのとおりだ… どんぴしゃり。スポーツマンぽかったな。だれなんだい？」

「ブラジル人、だと思う」

おそらくカストロ・ゴメス夫妻だ！ まったくおどろきだ。ダーマンがテラスで拳を握りしめ、カストロ・ゴメス夫妻とその「無礼」を激しく非難したのがわずか二週間前！ もっと詳しいことを教えてくれ、とカルロスがタヴェイラに頼もうとしたそのときだった。折あしく、侯爵が寝そべっていたソファから声を上げて、その日の『ガゼタ・イルストラード』に載っていた大事件について意見を聞かせてくれとカルロスに言ってきた。『ガゼタ・イルストラード』ですか？… カルロスは、その日の朝、まだなにも知らなかった。どの新聞・雑誌にも目を通していなかったのである。

「それじゃあカルロスにはだれもなにも言っちゃだめだぞ」と侯爵は叫んだ。「サプライズにしたいからな。ここに『ガゼタ』はないのか？ だれか『ガゼタ』を持って来てくれ！」

タヴェイラが呼び鈴の紐を引き、召使いが『ガゼタ』を持って来ると、それをひったくるようにしてタヴェイラが厳かに読み始めた。

「まずは肖像写真をカルロスに見せてやってくれ」立ち上がりながら侯爵は大声で言った。

「記事が最初ですよ！」とタヴェイラが叫んだ。『ガゼタ』を後ろ手に隠して守った。

しかし周囲の圧力に屈して仕方なく、開いた聖骸布のように雑誌

をカルロスの眼前に広げて置いた。カルロスはすぐにコアンの肖像写真をそこに認めた：濃い髭の顔を囲んで広がるのは六段になる散文。歌うように飾りたてた文体で、コアン家の奉公人の美德を、コアンの財政にかなする才能を、コアンの才気溢れる言葉を、コアン家のサロンの家具を絶賛している。コアン家ではホームパーティーの仮面舞踏会が近々大々的に行われることまでそれとなくふれていた。そしてこの文章のすべてに「I'd like to, すなわちジョアン・ダ・エーガのイニシヤルが署名されていた！

「愚かなことを！」とカルロスは思わず大声で言つて、雑誌をビリヤード台の上に投げ出した。

「愚かどころじゃない」とクラフトが言った。「こりゃモラルにたいする意識の欠如だよ」

侯爵はこれに反論した。記事は気に入った。すばらしい、なかなか巧妙だ！… それにそもそもこのリスボンに、モラルの欠如を気にする輩がいるか？

「クラフト、あんたがリスボンを知らないだけだ！ こじやあ、こんなことだれだつて当たり前だと思つてゐるんだよ。家族と親しい付き合いをしていれば主人を褒める。エーガは奥さんの賞賛者だ。そうしたら夫におべっかを使つてなが悪い。ここのリスボンじゃ当然の話だ：まあ見てみる、この記事、いづれきつと功を奏するから：それに見事な文章とはまさにこのことだ！」

侯爵はビリヤード台から雑誌を取り上げ、マダム・コアンの薔薇色の寝室を描写した一節を朗読した。エーガ曰く、「そこにはなにか親密にして清純なる香気がそこはかとなく漂つてゐる。さながら、この薔薇色そのものが、薔薇の香気を発しているかのよう」

「おいおい、この文章、どこもかしこも見事じゃないか！」侯爵は声を上げた。「あの野郎、大した才能だ！ おれにもこんな才能があつたらなあ！…」

「だからといって」大人しくパイプを吹かしてゐたクラフトが同

じ主張をくり返した。「だからといって、モラルが途方もなく欠如していることに変わりはない」

「たんなる非常識だ」クルジェスがソファの隅からむっくり起き上がりながら、自説に重みをつけるために一言ずつ区切つてご託宣を述べた。

侯爵はクルジェスに攻撃を仕掛ける。

「マエストロはいつたい何が言いたいんだ？ これ、見事な記事だよ。しかも、いいか、抜け目がない！」

マエストロと言われた方は議論するのが億劫で、ソファの反対側の隅で黙つてまた丸くなつてしまつた。

そこで侯爵は、立つたまま両手を広げてカルロスに声をかけ、クラフトは「モラル」という言葉でいつたい何が言いたいのか教えてくれないかと訊いた。

居間をいらしながら歩き回つてゐたカルロスは返事もせず、タヴェイラの腕を取ると廊下に連れ出した。

「なあ教えてくれ。ダーマソと例の人たちを見かけたのはどこだ？ どっちの方に行こうとしてた？」

「シアード街を下つてゐた。一昨日、二時ごろだね：きつとシントラ方面に行こうとしてたんじゃないか。ランドーにスーツケースをひとつ積み込んで、後ろから、もつと大きなトランクを抱えた召使いがクーペに乗つてついできたから：いやあれはどう見てもシントラ行きだな。それにしてもご婦人の神々しいこと！ 装いとトウレットいい、雰囲気といい、粋なところといい。おい、あれはヴィーナスだよ！… あいつどこで知り合つたんだらう？」

「ボルドーだとか船上だとか言つてたようだが」

「おもしろかつたのは、あいつがそのシアード街に振りまいてゐた愛想だ。右顧左眄で挨拶振りまいてさ… 身を屈めてご婦人にそつと囁いてだぜ。眼なんかトロロンとしちゃつて、いかにも勝利者でございって感じだつた！」

「あのバカ野郎！」絨毯を足で踏みつけながらカルロスは声を上げた。

「そうだ、言つてやれ言つてやれ」とタヴェイラは言った。「リスボンにたまたま洗練された上品な女がひとりやってきた。ところがその女を知っていて、シントラまでついて行こうつていう男がいた。そしてその男があいつというわけだ。たしかにバカ野郎だ……でもまあもういいじゃないか、ドミノゲームをやるうぜ」

ラマリエーテに最近ドミノゲームを持ち込んだのはタヴェイラだった。そして今ではときおり熱戦が繰り広げられていた。とくに侯爵が姿を見せたときはゲームが白熱する。タヴェイラの情熱は侯爵を負かすことだったからである。

しかし、そのためには侯爵が手を振り回すのを止め、ソファの奥でパイプを手に上の空でアアとかウウとかしか言わないクラフトを遣り込める主張を終えるまで待たなければならぬ。ところがエーガの記事がどうだ、「モラルにたいする意識」がどうだと話がまだ続いている。すでに神の話、ガリバルディの話、果ては名高き獵犬「フィノーリオ」の話まで出ていて、今度は良心を定義しようという始末……良心なんてものは公安にたいする恐怖心にすぎないと侯爵は考えていた。良心の呵責に悩むやつを見たことがあるか、クラフトくん。ないだろ？ そんなもの、コンデス通りの劇場のメロドラマのなかにしか存在しないんだよ……

「いいかクラフト、こういうことだ」侯爵をゲーム卓に引つ張つてゆこうとするタヴェイラに負けて、最後に言った。「良心の問題つてえのは教育の問題なんだ。マナーと同じで、後から身に着ける……それ以外の人たちにとつちや、刑務所や棒打ちにたいする恐怖心のことだ……ああ、先週の土曜みにみなさんドミノゲームをやりたいたおっしゃる？ わかりました。お付き合いたしましう……」

エーガの記事にもういちど度目を通していたカルロスも、ゲーム

卓の方へと向つた。着席して牌をかき混ぜていると、居間の戸口にステインブロケン伯爵が姿をあらわした。ジャケットを着て、白いチョッキには大きな十字の勲章をつけ、小麦の穂のような輝くばかりの金髪をびちつと撫でつけている。王宮で晩餐会に出たあと、その日のソワレの締めくくりに家族でラマリエーテにやってきたのである……

すると、かの腸の病氣以来伯爵に会っていなかった侯爵は、ドミノ牌を投げ出して伯爵に走り寄り、騒々しくあいさつをしながら抱きしめた。そして、伯爵に他の人と握手をして腰を下ろす暇も与えず、フィンランドの例の美しい歌を歌ってくれないか、魂に沁み渡る曲のうちひとつだけでも、と伯爵に懇願した。

『バラード』だけでも、ステインブロケン……これからパーティーがあつて、私もあまりゆっくりしてられないし。『バラード』だけでも……さあクルジェス、急いであつちに行つてくれ、ピアノを頼む……」

外交官は微笑むと、王宮の陛下の御前ですでに妙なる調べを奏でたので疲れておりまして、と言つた。ただ、侯爵の例の陽気な懇願はこれまでもいちどとして断つたことがなかった。そこでふたりは、名残惜しそうにソファの端から身を引き剥がしたクルジェスの後を追ひ、腕を組みあつてピアノの部屋に向かつた。そしてしばらく後には、半ばおろされた戸口の緞帳のすき間から、「バラード」をメランコリックに揺らす外交官の美しいバリトンが、ピアノのすすり泣きに入り混じつて漏れだし、居間に広がつていった。フランス語に訳された「バラード」の歌詞は、北国の寂しい霧、凍つていた湖、金髪妖精を歌っている。侯爵はこの歌詞が大好きだった。しかしタヴェイラとカルロスは、一ポイントトスタンの賭け率でドミノの大試合を始めていた。ただその晩、カルロスはゲームに興味もてず、集中できないままに「バラード」の寂しげなメロディーを小声で口ずさんでいた。そしてタヴェイラの牌が一枚だけ

になり、残った山札から自分がいつまでも牌を引かざるを得なくなってしまうと、隣のクラフトの方を向いて、シントラのホテル・ローレンスは一年中営業しているのかと訊いた。

「ダーマソのシントラ行きがよっぽどひっかかっているようだな」とタヴェイラがもどかしそうにつぶやいた。「さあ、やるぞ！」

カルロスは応えず、力なく牌を置いた。

「ドミノ！」とタヴェイラが叫んだ。

勝ったタヴェイラは欣喜雀躍し、自らカルロスの負け分を計算して、六十八ポイントだと告げる。

ちよんどそのとき侯爵が入ってきて、タヴェイラの勝利に腹を立てた。

「今度はおれと対決だ」椅子をぐいとつかむと大きな声で言った。「おいカルロス、おれに任せてくれ。この泥棒野郎を今けちよんけちよんにしてやるからな。そしたらまた三人でやろう：賭け率はどうする、タヴェイラさんよ。一ポイント二トスタンにするか？　なんだ一トスタンのままか：よし、おれがこつてり絞つてやる。さああんた、まずはこのダブルの六を片付けてくれ：」

カルロスはタバコを指に挟んだまま、相変わらず放心したようすでもうしばらくゲームを眺めていたが、突然思いついたように廊下を横切ると、音楽室に入ってしまった。ステインプロケンはアフオンソ・ダ・マイアに会うために、そしてホイストの試合を観戦するために書斎に行った。クルジエスは二本の蠟燭の間で鍵盤に眼を彷徨わせながら、哀愁を帯びた曲をひとり、即興で弾いている：

「なあクルジエス」とカルロスが訊く。「明日、シントラに行きたくないか？」

ピアノの音が止まった。マエストロはびっくりして見上げるが、カルロスはクルジエスに返事の暇さえ与えない。

「行きたいよな。行けば楽しいことばかりだから：明日、四輪馬車^{カレッシュ}で拾いに行くよ。いつものように鞆にシャツを詰めておい

てくれ。たぶん一晩泊ることになるから：八時きっかり、いいな？：みんなには口外無用だぞ」

カルロスは居間に戻ると、しばらくドミノの試合を眺めた。侯爵とタヴェイラは、腹の底に恨みでも抱えているように、黙ったまま牌をゆつくり動かしている。ピリヤード台の緑の羅紗の上では、陶製のランプシェードから落ちる光を受けて、白球がふたつ眠るように並んでいた。ときおりピアノのもの悲しい音がかすかに聞こえてくる。クラフトが、肘掛け椅子から腕をだらんと垂らし、いかにもしあわせそうに眠っていた。

〈第八章に続く〉

(1) 古代ローマの歴史家(五五年頃―一二〇年)

(2) イギリスのエッセイスト、歴史家(一八〇〇年―一八五九年)

(3) イギリスの政治家、政治経済学者(一七二九年―一七九七年)

(4) リスボンの歴史地区で最も上品な地域。

(5) 当時、リスボンの近郊にあった町。現在ではリスボン市の一地区になっている。

(6) 世界的に有名なバリのミュージックホール。

(7) 一七〇六年から一七五〇年までポルトガル王だったジョアン五世は、艶福家として有名だった。

(8) 一九〇一年コインブラで発刊された週刊誌。科学、芸術、文学を扱っていた。

(9) ワルツやポルカなどを次々に違うカップルが出てきて踊る十九世紀の舞踏会のラストダンス。

(10) 統治は一四九五年から一五二二年。

(11) リスボンの古いホテル。

(12) ジャコモ・マイアペーアのオペラ。一八六五年初演。

(13) 十八世紀ポルトガル王国の政治家(一六九九年―一七八二年)。国王ジョ

- ゼー世の信任を得て長期に啓蒙的専制政治を行った。
- (14) フランスの経済学者(一八一六年―一九〇一年)。
 - (15) フェンシングの一種。フルーレという細身の剣を使う。
 - (16) 初代ピーコンスフィールド伯爵、ベンジャミン・ディズレーリ(一八〇四年―一八八一年)。イギリスの政治家、小説家、貴族。
 - (17) テジョ川河口の、アテロと反対側の埠頭。
 - (18) ジュゼッペ・ヴェルディのオペラ。一八五三年初演。
 - (19) サー・エドウィン・ヘンリー・ランドシア(一八〇二―一八七三)。イギリスの画家。馬、犬、雌鹿などを描いた動物画で有名。
 - (20) ジャンルバティスト・グルーズ(一七二五―一八〇六)。フランスの画家。市民生活に題材を求めた風俗画を多く描いた。
 - (21) ピーテル・パウル・ルーベンス(一五七七―一六四〇)。バロック期フランドルの画家。